

第 1733 回 (11 月 4 日)

年齢階層別にみた

生鮮野菜の消費動向と需要予測

——野菜は誰が食べているのか——

石 橋 喜美子

近年、家庭内消費量の減少している野菜について、家計調査データを用いた重回帰分析により、従来示されたことのない未成年者や高齢者の消費実態を品目別に詳細に明らかにした。さらに、数品目について需要予測を行った。

1. 年齢による野菜消費量の差

年齢別の消費にかかわるデータは、世帯主年齢階層別の 1 世帯当たりの購入量が公表されているだけであり、それを世帯員数で除した 1 人当たりの購入量をもって年齢階層別の消費実態を把握することは困難である。ここでは、世帯ごとの各年齢階層に属する世帯員の人数を独立変数、野菜品目別の世帯での購入数量を従属変数とする重回帰分析を行い、年齢階層別の消費量を推計した。使用したデータは家計調査の 1982・83・84 年と 10 年後の 1992・93・94 年の 6 年分である。

20 品目の野菜について年齢階層別に消費量を推計した結果、野菜は高齢者の好む品目(さといも、だいこん、さやまめ、かぶ等)と、若者や中年層に好まれる品目(レタス、もやし、ばれいしょ、たまねぎ等)に大きく分類できることがわかった。このような世代による選好性はいずれの調査年においても認められ、10 年余りを経過しても品目による年齢別消費の特徴は強く存在していることが明らかとなった。

2. 調査年による野菜消費量の変化

次に 6 年分の推計結果を、同じ年齢階層で比較することにより、調査年による変化をみると、野菜消費量そのものは時代の経過と共に傾向的な変化のみられることがわかった。特徴的な変化を示す品目をあげると、かん

しょは 1982 年から 1994 年にかけて 70 歳以上を除くどの年齢層でも消費量の減少がみられる。レタスは若者や中年層での減少が大きい。もやしは、若者の消費量は減少しているが、40 歳以上の年齢層では逆に増加している。かぼちゃの消費量は 45 歳から高齢にかけての階層で大きく増加している。

前節の年齢による消費量の違いと調査年による消費量の変化を総合すると、高齢消費型に分類される品目は、さといも、だいこん、かぶ等日本の伝統的な料理に使用されることの多い野菜であり、1982 年から 1994 年にかけて消費量の減少傾向を示すものの多いことがわかった。一方、レタス、ばれいしょ、たまねぎ等、主として若者や中年層に好まれる品目は、洋風料理やカレーライス等若者の好む料理の材料となる野菜であり、これら若者の消費量の多い品目は 10 年余の変化でみると、まさにそれらの若い年齢層で最も消費量が減少していること、また最近健康志向の点から、消費量の増加しているかぼちゃ、にんじんは、高齢者での増加の大きいことが明らかとなった。

3. 加齢による野菜消費量の変化

前節では異なる調査年について、同じ年齢階層を重ねることにより、同年齢の消費傾向がどのように変化してきたのかをみたが、ここでは年をとること(加齢)による消費量の変化をみる。例えば 1984 年時点の 30~34 歳層は、1994 年時点では 40~44 歳層に加齢している。従って、84 年時点のある年齢層の消費量と 94 年時点の 10 歳年長者の消費量とを比較すれば、同じ人が 10 歳加齢したときの消費量の変化を近似的に示すことができる。

このような方法による野菜品目ごとの加齢による消費量の変化で、最も特徴的な結果の得られたのは、かぼちゃとレタスであった。かぼちゃは子供から大人への成長により、また大人になってからも年をとることで消費量が増加しているのに反してレタスの消費量

は、子供時代には成長と共に増加するが、20歳以上の階層では年をとるに従い減少することがわかった。これから判断すると、家庭内消費に限定すれば、高齢化に向かう社会において、レタス消費の伸びは期待できないと考えられる。20品目の分析結果から、かぼちゃ以外にほうれんそう、にんじん、ごぼう、もやし、ねぎも加齢により消費量の増加が認められた。しかし、10歳の加齢による消費量の増加が10年前の時点での10歳年長者の消費量水準にまで達しているのは、かぼちゃとにんじんのみであった。

4. 性別にみた野菜消費量の差

家計調査には、世帯構成員の年齢に加えて性別の情報も記録されているので、男女による野菜消費量の違いをみた結果、野菜の家庭内消費量は概して女性の方が多く、生鮮野菜全体でみると30歳から50歳にかけての階層で女性の消費量の方が男性より多くなっている。女性の方が消費量の多い品目は、かんしょ、ブロッコリー、にんじん、ごぼう、かぶ、かぼちゃ、きゅうり等である。一方男性の消費量の方が多い品目は、キャベツ、はくさい、ねぎ等である。

ただし、分析した最新年である1994年には、従来とはやや異なる傾向が認められた。にんじん、ごぼう、かぼちゃの3品目は、それまでの結果では女性の消費量の方がかなり多かったが、1994年には男性の消費量が増加し、女性との差が縮まっている。また、かぶは、男性は変化がないものの女性の消費量が減少したので、やはり男女差が縮まっている。にんじん、ごぼう、かぼちゃは、カロチンや食物繊維の多い品目であり、男性においても健康志向の強まっていることを表していると推察された。

5. 生鮮野菜の需要予測

分析に利用したデータは、10年余の間隔を置いて調査されたものであり、その結果を使用して将来の需要予測をすることが可能であ

る。家庭内消費量については、厚生省の年齢階層別将来推計人口と野菜品目別消費量の推計値から2000年時点の国内全体の家庭内需要量を推計した。近年大きく増加しつつある外食や加工品等の需要についてはデータが整っていないため、食料需給表の品目別国内生産量から家庭内消費量を減じた数量を、加工や外食等の需要量とした。また、最近の野菜輸入量の増加を考慮して、大蔵省「通関統計」で品目別に輸入量の把握できるかぼちゃとレタスの1988年以降について、輸入数量を国内生産量に加えた。

加工・外食等需要量の変化を求め、家庭内需要量の変化とあわせて2000年の総需要量を7品目について予測した結果、家庭内需要が減少しても家庭外需要が増加する品目（キャベツ、ほうれんそう、レタス）、家庭内外とも需要が減少する品目（きゅうり）、逆にどちらも増加する品目（にんじん、かぼちゃ）等、野菜により特徴のみられることがわかった。

家計調査を使用した野菜の消費分析から、家庭では若い人達に日本の伝統的料理に利用される野菜があまり食べられていないことがわかった。一方で高齢者を中心に健康志向による消費の伸びがみられる。健康のためには色々な野菜を食べることが大切であり、特に若者に野菜消費を促すための取り組みが必要と考える。